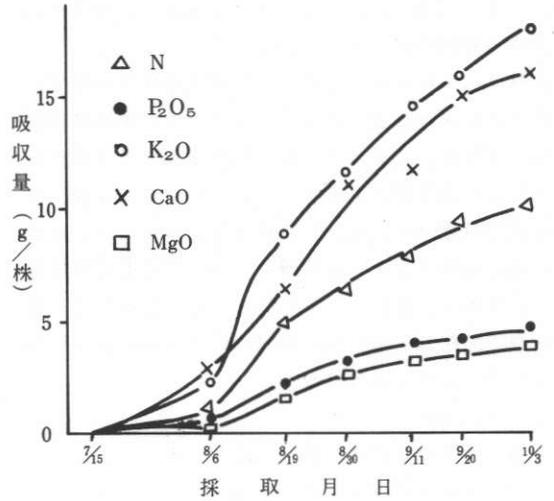


第2図 各成分の含有量の推移 (茎葉根, 果実)



第3図 各成分の吸収量の推移 (株全体)

#### 4 ま と め

アール当り180本植(6本/坪)で、チッソの吸収量は、 $1.8\text{kg}/\text{a}$ となる。また、抑制メロンはハウス栽培であるため肥料成分の流亡が少ないことなどを考えると、吸収量がおおよそその標準施肥量と考えられる。しかし、前にも記したように、本試験は一条値であることを考慮すると、多くとも $1.8\text{kg}/\text{a}$ で、それよりわずかに少ない量が適当と思われる。また、カリのぜいたく吸収、

リン酸の肥効が劣ることなどを考慮すると、施肥割合は $\text{N}:\text{P}_2\text{O}_5:\text{K}_2\text{O}=10:10:10$ 程度が適当と思われる。前作のチッソの残効の程度によっても施肥量を増減する必要がある。施肥時期は、定植前の基肥と、摘芯後および生育状況を見て、果実の肥大期の2回の追肥を行なう必要がある。なお、この結果にもとづいて施肥試験を行ない、より正確な施肥基準を設定する必要がある。

## イチゴの栽培体系確立について

### 第1報 定植期とマルチ効果

佐々木 健 治

(岩手県農業試験場県北分場)

#### 1 ま え が き

近年、岩手県の県北畑作地帯に各種の野菜が導入されるに伴い、イチゴ栽培も沿岸北部を中心にわずかながら増加しており、今後の安定多収技術体系の確立により、着実な伸びが期待される。

しかしながら、冷涼な気象下にある県北のイチゴの露地栽培に関して、いまだ十分な検討がなされておら

ず、特に定植期とマルチ効果、さらに開花期における霜害回避等の問題解決が必要と言える。

このため、本試験は以上のような点について検討したものであり、以下その概要について報告する。

#### 2 試 験 方 法

前年度予備試験で透明マルチを使用した場合、開花期が晩霜に遭遇し、花蕾の黒変枯死状態がみられ減収

を示した。

このことから、本試験では黒色マルチを中心に定植期の早晚と収量との関連性について検討し、加えて霜害回避の目的で秋マルチを設定した。

[秋マルチについて] 涼やかな気象条件におかれている県北のイチゴ栽培にとって、マルチの使用は必須の条件と言える。しかしながら、越冬後もマルチ状態を継続すると開花期が早まり、ところによっては霜害による減収の危険を伴う。この点を解決するため、定植と同時に透明フィルムを被覆し、越冬前の生育を促進するとともに、翌春マルチを除去することにより、裸地状態で開花期を遅らせ、晩霜回避を計る。以上の考え方が秋マルチの内容である。

1 供試条件

- (1) 9月1日定植 裸地 区
- (2) 9月8日定植 裸地 区
- (3) 9月1日定植 全期黒色マルチ区
- (4) 9月8日定植 全期黒色マルチ区
- (5) 9月15日定植 全期黒色マルチ区

(6) 9月8日定植 透明秋マルチ区

2 耕種概要

栽植様式

$$\left(\frac{45+75}{2}\right) \times 30\text{cm} \quad 556 \text{株/a}$$

施肥量(成分kg/a) 堆肥 200kg

N-1.6 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-2.9 K<sub>2</sub>O-1.6

(有機入イチゴ化成, BMヨーリン)

3 供試品種 ダナー

4 一区面積および区制 一区18m<sup>2</sup> 2区制

3 試験結果および考察

1 生育経過

第1表は越冬前および越冬後の生育を示したものであるが、マルチ使用の効果についてみると、裸地区に比べてマルチ区は明らかに生育量増加の傾向が認められ、特に透明秋マルチ区は草丈、葉数ともに全期間優位を占めている。

定植期の早晚と生育との関係は9・1黒マルチが9・8黒マルチに劣ってはいるが、概して定植期が早まる

第1表 生育調査

区名	調査日	10月11日		11月29日			5月7日			1腋 株芽 当り数	1花 房 当り数	開 花 期 (月・日)	収 穫 始 (月・日)	収 穫 終 (月・日)
		草 丈 (cm)	葉 数 (枚)	葉 柄 長 (cm)	葉 長 (cm)	葉 数 (枚)	葉 柄 長 (cm)	葉 長 (cm)	葉 数 (枚)					
1	9月1日 裸地	18.2	7.7	8.3	9.0	9.0	4.2	7.0	9.6	3.9	6.6	5・19	6・12	7・13
2	9月8日 裸地	18.7	7.8	8.7	8.2	9.1	4.4	6.7	7.7	2.8	6.6	5・16	6・12	7・13
3	9月1日 黒色マルチ	17.8	7.9	7.8	9.0	9.1	4.4	6.6	11.4	4.1	8.1	5・15	6・12	7・13
4	9月8日 黒色マルチ	19.0	8.7	9.3	8.6	10.1	4.4	6.8	11.2	4.5	8.9	5・15	6・11	7・13
5	9月15日 黒色マルチ	18.3	6.3	8.4	8.4	7.4	4.3	6.6	8.7	3.6	7.1	5・15	6・11	7・13
6	9月8日 秋マルチ	19.6	9.2	9.7	9.0	10.5	4.3	6.9	11.7	4.5	8.5	5・17	6・13	7・13

につれて、裸地、黒マルチとも生育量が増加する傾向を示した。さらに腋芽数、花房数においてもマルチ使用と早期定植により増加の傾向がみられた。

一方、開花期は秋マルチの場合黒マルチに比べて2日程遅れ、裸地並となっており、晩霜回避という当初の目的とも合致する結果となっている。

2 収量および品質

総収量は裸地で幾分低くなっているが、マルチ区ではa当り200kg前後の収量となっている。これを上果収量について比較してみると、秋マルチが177kg/aで最も高く、以下9・8黒マルチ>9・1黒マルチ>9・15黒マルチ>9・1裸地>9・8裸地の順序となっており、9月8日の定植では裸地に比べて黒マルチで197%

%, 秋マルチで214%と2倍前後の収量となっており、マルチの増収効果は明らかで、特に秋マルチの効果は顕著であった(第2表)。

次に定植期の早晚と収量との関係についてみると、生育の場合と同様9・8黒マルチが9・1黒マルチより多収となっているが、傾向としては早期定植による増収が認められる。

さらに被覆条件が品質に及ぼす影響を奇形果と病果の出現割合からみた場合、第2表からも明らかのように一定の傾向が認められた。つまり、裸地の奇形果率が10%以上を示しているのに対し、マルチ区では2%前後の発生にとどまっており、裸地との対比において考えると、マルチによる花芽分化期を含む秋季保温が

第2表 収量調査(20株当たり)

区名	調査日	総収量		上果収量			a上果 当収量 (g)	上1 果重 (g)	上 果率 (%)	小 果率 (%)	奇 形果 率 (%)	病 果 率 (%)	1着 株 当 り 数 (コ)
		個 数 (コ)	重 量 (g)	個 数 (コ)	重 量 (g)	同 左 比 (%)							
1	9月1日 裸地	682	6,037	304	3,667	100	102	12.1	61	24.9	13.1	1.3	34.1
2	9月8日 裸地	514	4,606	250	2,980	81	83	11.9	65	23.2	11.2	0.9	25.7
3	9月1日 黒色マルチ	816	7,556	461	5,541	151	154	12.0	73	21.1	3.3	2.3	40.8
4	9月8日 黒色マルチ	894	8,129	479	5,885	160	163	12.3	72	24.2	2.0	1.4	44.7
5	9月15日 黒色マルチ	696	7,078	429	5,469	149	152	12.7	77	18.4	2.0	2.3	34.8
6	9月8日 秋マルチ	981	8,952	512	6,377	174	177	12.5	71	24.8	1.0	2.9	48.8

注. 調査基準 上果: 7g以上の正常果 病果: 7g以上の病果  
奇形果: " 奇形果 小果: 7g以下の正常果+奇形果+病果

奇形果防止上効果があるのではないかと推察される。しかし一方、病果の発生は逆にマルチを使用することにより高まるようである。

あるが、各供試条件とも収穫のピークが6月25日前後にあり、県北地帯における露地栽培での収穫期間は、収量的にみて6月15日から7月10日までの25日間程度と考えられる。

時期別上果収量については第3表に示したとおりで

第3表 時期別上果収量(20株当たり)

区名	調査日	6月11-14日		15-18日		19-22日		23-26日		27-7月1日		2-5日		6-9日		10-13日	
		個 数 (コ)	重 量 (g)														
1	9月1日 裸地	2	32	21	358	45	735	89	1,064	75	772	45	423	23	245	4	38
2	9月8日 裸地	2	27	30	510	33	420	66	758	67	723	34	361	15	153	3	28
3	9月1日 黒色マルチ	3	43	27	479	54	795	155	1,786	101	1,132	78	812	32	364	11	130
4	9月8日 黒色マルチ	4	73	44	798	71	1,059	144	1,669	108	1,130	66	704	34	369	8	84
5	9月15日 黒色マルチ	5	108	46	853	58	827	121	1,472	96	1,098	77	828	23	255	3	27
6	9月8日 秋マルチ	1	12	27	517	60	1,072	172	2,113	130	1,270	52	520	50	667	20	208

#### 4 む す び

以上、本年の結果についてその概要を述べてきたが、前述したように、当地方でのイチゴ栽培は冷涼な気象条件下にあるため、採苗から定植までの育苗期間が短く、そのため良苗を得ることや極端な早期定植は困難

である。これ等の点を補う意味においても、本試験の結果からも明らかなように、透明秋マルチは収量決定に大きく影響する越冬前の生育量を確保するとともに翌春の晩霜を回避する方法として、県北のイチゴ栽培にとって有利な技術と考えられる。